『平田 悦朗先生』　－耳に残ること　心に残ること－

本郷 逕子

研究室の電話が鳴る。受話器をとると「ひ・ら・た・です」と、低くて深い『厳かな』響のお声が聞こえ、私はその度に背筋を伸ばし椅子に座り直してご用をうかがったものである。私もこのように明確な拍とアクセントで発音するように心掛けねばと、「か・し・こ・ま・り・ま・し・た」などとしっかりお答えしたのも、懐かしく思い出される。

外国人留学生の入試には聴解の試験があり、試験が始まる１時間程前にそのための試験場の準備を行う。必ず平田先生がおいでになり周到な準備をなさるのだが、そのお手伝いをするのが私の大きな楽しみであった。それは、準備作業をしている間、平田先生の吹き込まれた「蜘蛛の糸」がテストテープとして流れるからである。「蜘蛛の糸」は、なぜか私の感覚には最後の部分をのぞいて何となくおどろおどろしいイメージがあったのだが、平田先生のは落ち着きのある、歯切れのよい淡々としたさわやかな読みで、音声とはこうも大切なものかと思いながら聞き惚れたものである。

このような先生の日常の美しい日本語は、そのまま先生のお人柄を表していると言えよう。なさること仰言ること、すべて真っすぐな筋が通っているのに、頑ななシャクシ定規的なものではない。真面目さ、ユーモアのセンス、礼儀正しさ、厳しさ、暖かさ、品格が不思議な調和をもって存在している。そして、学内の教職員に対しても、学生に対しても、外国人留学生に対しても基本の品格ある姿勢は崩されない。

外国人留学生と接する平田先生とここ何年間かご一緒に仕事をさせていただいた。学生ひとりひとりに対する先生のこまやかなお心遣いは、どの学生にも通じており、特に一年間という短期の日本語・日本文化研究生でも、先生の日本語音声教育、伝統芸能関連のお授業や、見学会などを通じて多くを学び、また先生のお人柄に魅せられなかった学生はいないと言える。

電話が鳴っても、「ひ・ら・た・です」というお声も聞けなくなり、背筋をピンと伸ばしてさっそうと草の生えた広場を横切っていらっしゃるお姿もお見かけできなくなったのが寂しい。学会、研究会、その他の会合などでまたお目にかかれるのを楽しみにしている。

平田先生、どうぞ、いついつまでもお元気で！